

聖書:列王記第二6章1～7節

説教:どこに落ちたのか

はじめに

第二列王記は、預言者エリヤは竜巻に乗って天に上げられた後、エリシャがその後を継いで預言者としての働きを記し、そのことを5章まで見てきました。今朝は6章の最初の所を開いているところですが、皆さんはここを読んでどう思われたでしょうか。斧の頭というのは鉄でできています。その斧の頭が、エリシャの業によって水の中から浮かび上がらせ、取り戻した。やっぱりエリシャはすごい預言者だ。そんな話なのでしょう。しかしよく考えてみましょう。私たちは既にエリシャがどれほどすばらしい預言者であるかを知っています。それなのにどうしてわざわざ斧の頭の話を書くのだろう。不思議ではありませんか。いつもいいますが、聖書は人の救いのために必要なことだけが書いてあり、意味のないことは一つもありません。エリシャはすばらしかったでは終わらない、何か重大な意味がここに述べられているのではないか。ではそれは何か。ご一緒に考えてまいります。

1 預言者の仲間たち

1) エリシャとの出会い

そこで、そもそもエリシャが預言者の仲間たちとどのような関係があったのか、少し復習しながら見ていきましょう。三つあります。まず最初は、エリヤが竜巻に乗って天に上げられた時のことです。エリシャは先生であるとエリヤから絶対に離れませんが誓っていましたが、竜巻の中に火の戦車と火の馬が現れたのを見たとき、エリシャは立ちすくんでしまい、エリヤを見失ってしまいます。一人残されたエリシャはエリヤが残っていた外套を手につかんで、悲しみのあまりに思いっきりヨルダン川の水を打つと、水が両側に分かれます。それまでこのような奇跡を行うことができたのはエリヤだけですから、それが今エリシャができたということで、エリシャがエリヤの次の預言者であることがはっきりします。

その様子を遠くから見ていたのがエリコに住んでいた預言者の仲間たちで、彼らはエリシャの所に行き、地にひれ伏して礼をし、やがてエリシャを中心とした神学校が出来上がり、集団で生活するようになった。こうやってエリシャと預言者の仲間たちが出会っていきます。これが一つ目です。

2) 鍋とパン

二つ目の記事は、その神学校で起きた、食べ物に関するものでした。ある神学生が野原で取って来た蔓草の実を鍋で煮て食べようとしたら毒が入っていて食べられないというとき、エリシャが麦粉を入れたら食べられるようにしました。それが終わったら今度は、ある人が神学生に食べてもらいたいと思って持って来たパンを分けようとするのですが、まったく足りない、どうしようと悩んでいたとき、エリシャがそのパンを分けたところ、学生たちが満腹するだけ食べたのにパンが余った。これが預言者の仲間たちに関する二つ目の出来事になります。

3) あれは借り物です

そして今日のところが預言者の仲間たちに関する三つ目の記事となります。ここで何が起きているのか、詳しく説明する必要はないでしょう。新しい場所に移って神学校の校舎を建てるために木を切り倒そうと斧を振り下ろそうとしたら斧の頭がすっぽりと抜けてしまい、水の中に落ちてしまいます。それを知ったエリシャは「どこに落ちたのか」と尋ねてから斧の頭を水の中から浮かび上がらせるわけですが、そのとき神学生はこう叫びました。5節後半です。「ああ、主よ、あれは借り物です。」当時、イスラエルでは鉄製品は非常に貴重で、木を切り倒すにしてもどこかに行って斧を借りてこなければなりません。そんな貴重なものを水の中に落としてしまったのですから、神学生が嘆くのは無理ありません。それでエリシャと一緒に探してくれた、そんなふう読めるわけですか。しかし、エリシャはただそれだけで動いたのでしょうか。なにかもっと重大な理由があるのではないか。

2 イエスを指し示す

1) 聖餐

そこで手がかりとして、預言者の仲間たちが集う神学校で起きた鍋とパンの事件がどんな意味をもったことであつたのかを一度思い出してみます。鍋に入っていた毒をきよめて飲むようにしたことと、わずかのパンを百人以上の学生たちに分け与えたら、学生たちが満腹してもなおたくさん残ったこと。これらのことは、後に来られ

たイエスが最後の晩餐の席で教えてくださいました。鍋の煮物と関係があることを以前に言いました。鍋の煮物が、十字架で流されたイエスの血であり、パンは十字架で裂かれたイエスのからだを指し示している。旧約聖書にはイエス・キリストというお名前はほとんど出て来なくても、さまざまな場面で十字架の出来事と結びついていました。そのようなことをお話しました。

2) 旧約聖書で使われる「ゆだねる」

であるならば、今日の箇所の斧の頭についてもなにかイエス・キリストと関係があるのではないかと。そう考えべきではないでしょうか。そこで注目したいのは、預言者の仲間が叫んだことばです。5節後半を読みます。「ああ、主よ、あれは借り物なのです。」一見何でもなさそうなことばです。しかし調べてみると、ここの「借り物なのです」ということばは旧約聖書の中でここともう一箇所しかでてこない、きわめて珍しいことばが使われていることが判りました。もう一箇所というのは第一サムエル記1章で、ハンナという一人の女性のことが書かれているところです。ハンナは子どもが与えられずに長く苦しんでいましたが、神の前で心を注ぎだして祈った結果一人の子どもが与えられていきます。その子どもがおよそ一歳になったときに神さまのところに連れて行き、神に感謝の祈りを献げます。ハンナは次のように祈ります。第一サムエル記1章26～28節。「ハンナは言った。『ああ、祭司様。あなたは生きておられます。祭司様。私はかつて、ここであなたのそばに立って、主に祈った女です。この子のことを、私は祈ったのです。主は私がお願いしたとおりに、私の願いをかなえてくださいました。それで私もまた、この子を主にゆだねたいです。この子は一生涯、主にゆだねられたものです。』こうして彼らはそこで主を礼拝した。」

ハンナの祈りの中の「主にゆだねられたものです」、これが今日の箇所の「借り物なのです」とまったく同じことばで、旧約聖書の中では二回しか出てこないのです。主にゆだねられたこの子どもの名前はサムエルといい、後にイスラエルの預言者となってダビデに油を注いで王に任命するという大切な働きをしていきます。そのときに出てくるのが「主にゆだねたいです」です。

斧を水に落としてしまった神学生が思わず叫んだことば。言い換えれば「ゆだねられたものです」となる。それがエリシャにとっては聞き捨てならない、非常に重要なことばだった。だからわざわざ

わざわざやってきて、斧の頭を浮かばせたのではないかと。なぜ重要だったのか。このことが私たちの救いに大きく関わる大切な出来事だったからではないか。その証拠にわざわざ聖書に記されているのです。ではいったい、「ゆだねられたもの」ということばが私たちの救いとどう関係するのか。そのことを次に考えます。

3 神の救いの計画

1) さばきをゆだねられた方

エリシャが川の水を打ったら左右に分かれたこと。あれはモーセが海を左右に分けて乾いたところをイスラエルの民が渡ってエジプトから救われたことを想起させます。

またエリシャが鍋の煮物の中にあつた毒をきよめて飲めるようにしたこととパンをあり余るほどに与えたということが、主が定められた聖餐式と関係があると言いました。であれば、斧の頭が「ゆだねられたもの」という意味を持つということから、そのことがなにか主の働きと関係があるのではないかと。そこで主がヨハネの福音書5章21節から24節で次のように語っていたことを思い出します。

「父が死人をよみがえらせ、いのちを与えられるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子に委ねられました。それは、すべての人が、父を敬うのと同じように、子を敬うようになるためです。子を敬わない者は、子を遣わされた父も敬いません。まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています。」

この中で、父なる神が子であるイエス・キリストに「すべてのさばきをゆだねられた」とあります。

「さばきをゆだねる」という言い方には、二つの意味があります。一つ目は、イエスご自身が世をさばかれるという意味です。このことは確かにマタイの福音書にあつて、主が栄光を帯びて再び来られるときは、すべての国の人々を御前に集め、羊飼いが羊をやぎからより分けるようにより分けて、羊を自分の右に、やぎを左に置くと、主ご自身が語っておられます。

しかし「さばきをゆだねる」はもう一つの解釈があり得る。父はだれをもさばかずに、その代わりに、主ご自身をさばかれた。このことは二千年前の十字架で確かになされました。こうして見てく

ると、主にゆだねられたものとは、罪のさばきという非常に大切な働きは、イエスのみわざと大きく関わっていたことが判ります。

2) やがて来られる方を指し示す

エリシャはやがて来られる救い主が、父なる神からすべての権威を委ねられた方であるかをよく知っています。ゆだねられた物、それがたとえ斧の頭であっても、水に落ちたならば取り戻さなければならぬと考えます。そのときエリシャは神学生に尋ねます。「どこに落ちたのか。」それは、ゆだねられた方はどこにおられるのかと、私たちに尋ねる質問のようにも聞こえます。最初は誰かに教えてもらったとしても、いつかは自分の指で「この方は私たちの主です」と指し示す時を待っている。そのように取ることができます。

こんなふうに斧の頭のことと、救い主のことを結びつけるのは考えすぎだというのでしょうか。斧の頭はただの鉄に過ぎず、主である方と比べるのは強引だと思うのでしょうか。私たちはいろいろな意見を持つかも知れません。しかし大切なのはエリシャがどう思ったかです。ゆだねられ物が水の中に落ちたままでよいはずがない。それは必ず水から引き上げて元に戻さなければならぬ。救いのみわざは必ず行われなければなりません。神ご自身のいのちを捨てるために、十字架の道に立ちほだかるあるゆる邪魔物はすべて取り除いていきます。神の愛はこのようにして私たちに示されていることを覚え、御名をあがめます。